【研究ノート】

ケネディ内閣の形成

——ロバート・ケネディ司法長官・その一——

清水良三

目次

(一) はじめに
(二) 本論

(一) はじめに

歴史を語る時に若しも〜であったら、これこれの結果が生じたであろうということを論ずることは、よく行われることである。アーサー・シュレジンジャー・ジュニアはその事が歴史学にとって、どういう意義をもつのか或いは意義を持つどころか、まったく無駄な事であるのかにまったく触れることなく、いきなり、ロバート・ケネディの回想記(Robert Kennedy in His Own Words, edited by Edwin O. Guthman and Jeffrey Shulman, Bantam Books,

New York, 1988）の序言の中で「ロバート・ケネディが大統領になっていたら多くのことが変っていたろう。アメリカの軍隊はもっとはやく、多分一九七二年ではなくて一九六九年にヴェトナムから撤退していただろう。そしてこれらの期間中に殺された多くのアメリカ人や、より多くのヴェトナム人は、今日生き残っていたであろう。それは又ジョン・ケネディのニュー・フロンティアやリンドン・ジョンソンの大社会構想の業績を固めかつ拡大することによって、政治的循環の改革面を完成化させたであろう」と言っている。そして「〜であったろうという叙述は幻想の試行であるが」と断ったあと、それでもロバート・ケネディは、其の様な推測をされてもそれに堪えられるだけの活力と創造性に富んだ政治的人物であったと言っている。このノートは、そのロバート・ケネディの兄の内閣への入閣過程についての素描であると共に、彼の人物についての物語でもある。なお紙面の都合で二回に分けて発表することとした。

（二）本　論

一九六〇年十二月半ば頃のことである。ワシントン街路に降った雪は車道の端によせられて堤をつくっていた。そのとき膚寒い空気を切ってロバート・フランシス・ケネディはペンシルヴァニア並木路を司法省に向って歩いていたのである。彼はうつむいて歩いていた。それは考えごとをしている時の彼の習慣であった。彼は帽子をかぶっていなかった。数ヶ月間休みなしに動きまわった彼の眼のまわりには、深い疲労の跡がきざまれていた。

この朝彼は個人的な問題について考えていたのである。その問題は、彼がそれまでに会った中で一番重要な問題で

あったろう。合衆国の大統領に選出された人の弟として、また、もっとも親しく信頼されている人として、彼はジョン・ケネディ政府の新内閣の司法長官に任命されることを受諾すべきかどうかを決定しようとしていたのであった。

選挙の終った翌日、ジャックはボビーのところへやって来た。そして此の二人の兄弟だけが理解出来る簡単なつぶやくような会話の中で、多分ボビーに司法省の責任を持って貰わなくてはならないだろうと言った。ボビーはこの考えに強く反対した。彼は、自分はまったく政府から離れたところにいるつもりでいた。

それにひきつづく数週間、彼はジャック・ケネディが希望しているような型の人物をニュー・フロンティアに加盟させるべく、骨の折れる人探しをしたのであるが、この間に彼の気持は変っていた。彼は閣僚水準においてではないが、ともかく、兄のために仕事をしてやろうという考えを持つところまで、譲歩したのである。この二人の間に殆んど言葉はかわされなかった。大統領選出候補がその弟を司法長官にしたがっていることに、疑いはなかった。だが、彼は一般の人々のケネディ家族に対する批判の危険性についても気がついていた。「それは他人からあなたが受ける批判のうちで、一番気にさわる種類の批判だ」とジャックは説明した。「だが、彼はその職務のために私が得られるもっともすぐれた人物である。」と彼は語ったのである。

長い間考えてからボビー・ケネディは、国防省あるいは国務省で、閣僚を補佐する程度の地位に就こうと考えた。「私は今までの人生を、ずっと悪い奴ばかり追いかけまわしてきた。」「私は変ったことをやって見たい」と彼は一人の友人に告白した。けれども、それは容易なことではなかった。ジョン・ケネディは彼が希望するような型の人物を見つけるのに困難を感じていた。また、全くはっきりして来たことは、大統領選出候補が彼の判断に依存しようとしていたことであった。かくて、重要な省内で、その省の長官よりも大統領に緊密な立場にいる属僚がいることは、新

しい内閣のどの役員にとっても、我慢の出来ない状態が生まれて来ていた。ボビー・ケネディはこのことを実感したのであった。

クリスマスが近ずいて来るにつれ、彼の司法長官就任を求める圧力が増大して来た。ケネディ一族の家長・ジョー・ケネディは、ニュー・ヨークでいらだっていた。「彼のどこが悪いのが私には分らない。ジャックは彼の周辺にいるすべての立派な人物を必要としている。ボビーよりもすぐれた者はいない。彼は何をしたいのかについて、六年間も私に何も言わなかった。君もそのことは知ってるだろう」。ジョーはそう語った。

ニュー・フロンティアの問題のほかに、ボビー・ケネディは彼自身の経歴の問題とも、取り組んでいた訳である。彼がもし自分自身のための政治生活をきり開こうとするなら、彼はすぐにでも政治活動をはじめなければならなかったろう。彼はまだ若かったけれども、選挙によって得る政治的地位の獲得を求める運動を開始するには、どちらかというと年をとりすぎてしまっていた。彼は二年以内にマサチューセッツ州の知事に立候補すべきであろうか。もしも立候補すれば、ボビーは簡単にその選挙に勝つだろうと彼の兄弟は打明け話をしていた。やがて空席になるジャックの上院の議席は、もしもボビーが希望しさえすれば、ボビーの手に入ることはわかり切っていた。（ボビーは、〃私はジャックの議席を手に入れようとは思ってはいない〃とつっぱねるように言った。〃私が上院に入ろうとする唯一の道は、それを獲得するために立候補することだ〃）。彼は或る新聞を買収するという事を面白半分に考えてみたこともあった。だが政治に奉仕したいという考えのほうが、彼をもっとひきつけていた。七十二歳だったジョー・ケネディは、やがてケネディ一家の巨大な事業と財務機関を管理する誰かを必要としていた。親に似ている息子だと言われて来たボビーはこの仕事を引き受けないかと言われていた。だが、ボビーは、彼の考えによると、ただ単に金銭をつく

ることだけとしか考えられないような仕事を好まなかったのである。

ジャック・ケネディはその週のうちに、ボビーが決断を下してくれることを必要としていた。大統領選出候補は組閣を完了し、その施政体制確立のために動きたかったのである。或る日ボビーは司法省の大きな入口を、誰にも認められずに通りぬけた。そして連邦検察局長官J・エドガー・フーバーの事務所に静かに入って行った。フーバーの意見を彼はききたかったのである。司法省には犯罪とたたかうべく、なお為すべき仕事が沢山あるだろうか。彼、ボビー・ケネディが何か役立つことをすることが出来るだろうか。フーバーは自分の前にすわっている若い男に、犯罪に対して気分を新たにたたかいを挑む可能性が開かれていることについて、熱心に彼の意見を述べたのである。だがボビーは司法省を去る時に、まだ決断がつくような気分にはなっていなかった。そして国会議事堂の方へ足を向けたのである。静かな最高裁判所の建物の中で、彼は旧友ウイリアム・O・ダグラス判事と昼食を共にした。ニュー・ディール時代からダグラス判事はケネディ家族の友人であった。彼とボビーはロシア国内の旅行制限が解除された当初に一緒に旅行したことのある間柄であった。巖のような感じのするダグラスに、ボビーは次々と質問し、彼の忠告を求めたのである。

その日の午後、ずっと彼はくよくよと考えていた。彼は半時間ほど表に出ていた。それからやめて行く司法長官ビル・ロジャースと話し合うために司法省に戻って来た。夕方近くになって彼は、この任命を受けるべきではないという当初の結論にかたむきはじめた。諸新聞はボビーの任命について批判的な記事を載せていた。ミルトン・アイゼンハワーはかつて彼の兄弟と共に、ワシントンで全時間制の勤務につくことを拒絶したが、共和党員たちはそのことを思いおこさせて、ボビーの就任問題に軽蔑の念を示したのである。ボビーはその夜、ジョージタウンの家にいるジャ

ックに電話をかけた。そして彼の任命を引き受けるつもりはないと言った。だが、大統領選出候補は彼の返事を受けつけなかった。

「明日、朝飯の時に話しあおう」と彼は言った。ボビーは承知した。彼はN街三三〇七に出かけて行った。今度はジャックは従来以上に強く彼の意見を主張した。彼はボビーを必要とし、ボビーを希望した。すでに、多くの新聞に書かれた批評は、もう殆んど出尽したと彼は感じていた。発表当時には騒がれるだろう。だが、それから其の騒ぎは消えて行ってしまうだろう。（「ジャックは夜盗的な勇気を持っていたと言わなくてはならない」と後になってボビーは言っている。）今度はボビーがはっきりと決心した――彼は、司法長官の任命を受けようと思ったのである。

この決断によって彼の生活気分は楽になって来たようである。その日の午後になると、旧来のケネディのユーモア感覚がすべての芳香をはなってもどって来た。電話での大統領選出候補との話し合いが終る時、つけ加えて一つの考えをまた述べた。『私の任命を発表する時に、もう一人の著名なアメリカ人、ドワイト・アイゼンハワーについての意味を説明してやったらどうだろうか。こういうのさ「私は彼が私のブラザー（同胞）であることを知っている。それでも私は彼を必要とするのだ」』。この二人のケネディ・ボーイは嬉しさに思わず、くすくすと笑ったのである。

多くの人たちは三十五歳のボビーの法律についての経験および能力について懐疑的であった。彼は私法領域で法律実務にたずさわったことは決してなかった。彼の政治関係の経歴はすべて調査機関の仕事で占められていた。最初のものは上院議員ジョー・マカーシーの調査小委員会の仕事であったし、後には上院議員ジョン・マクレランの不正取引委員会の仕事をした。大統領の弟であるということが主たる理由で任命される人ではなくて、堂々たる法曹会の大物が必要であるということが人々によって語られていた。

司法省は、本質的には其の国民の法官である。それは犯罪人を追求し、彼らを監獄に留置し、市民権の実現を強行し、価格の固定化とたたかい、政府の財産に関して生じた訴訟問題を取り扱い、この国への移民の流入を統制し、水利権に関する紛争を解決し、その他多くの事柄を処理する。

ボビーは次のように反論した。「司法長官になるために完璧の準備をしようとしても、そういうことはなし得るものではない」。大統領もこの言葉に賛成した。その仕事に必要とされるもっとも重要なことは健全な判断、廉直な人格、仕事をしようという意志、学び得る能力である。「ボブは、そのすべてを持っている」と新しい行政府の首長は述べた。

法律的な技術を身につけている人は、司法省の中に沢山いるとボビーの友人たちは指摘した。司法省が必要としているものは、指導の能力であった。すべての政府部門と同じように司法省は、イニシアティブを失なっている。それは危機をふせごうとつとめる代りに、危機があった時に、それに反応しているとボビーは思ったのである。大統領は、彼のウィットで、ボビーの任命にともなって発生した熱気の一部をおいはらった。彼がワシントンのアルファルファ・クラブにあらわれたのは、かような社交的な場への大統領就任後のはじめての顔出しであったが、その時、彼は次のような冗談をとばしたのであった。「法律実務に入る前に、僅かばかり法律的な訓練を受けたことがあるからと言って、その人のどこがわるいのか。」

その仕事に関する彼の準備がどのようなものであったにせよ、何時もの彼のとおり、ボビーは迅速に動きはじめた。彼は少年犯罪の研究をはじめた。そして連邦所属の保護機関に保護されている五千人の少年たちにとっては、特別の相談および調停機関を準備して、彼らが通常の生活に帰れるよう準備してやることが必要であると彼は思った。

彼はこの計画を進行させるために、六一万八〇〇〇ドルを議会に要求した。それは、何がなし得るかを示すために計画された試験的なものであった。或る週末に、彼はひそかにワシントンを去って、友人ダヴィッド・ハケットと共に、ニューヨークに飛んだ。そこで、彼はシャツの袖をまくりあげた姿で、ニューヨークの黒人居住地域を歩いたが、それは、自分自身で二つの少年ギャングの団員たちと話をし、その生活状態を視察するためであった。

不正取引委員会で仕事をしていた当時から、ボビーは、不正直な検事や実業人たちは、与太者たちと同じ位邪悪なものであり得るということを知っていた。不正直な経営は、腐敗した労働者をそだてると彼は信じていた。こうして、彼は司法省の彼の前任者たちが暴露した電気会社の料金決定方法についての醜聞を知った時に、ぞっとしたのであった。彼は、実質上、合衆国全域にわたって、すべての主要な会社その他の利益集団において見られる価格政策に対して、たたかいを挑むことを約束したのであった。ボビーは、また組織的な犯罪とたたかうための法案を一括して議会に提案した。この法案は、各州が連邦機関からの援助を求める場合に、ＦＢＩの管轄範囲をひろげようとするものであった。

市民権の問題は彼の心をもっとも熱狂させる問題になるだろうということを、彼は以前から期待していた。選挙権に関する事件が、やがて、雨あられのように起って来るだろうと彼は期待していたのである。そして、勿論学校の無差別入学についての紛争もつづくであろうと思われていたし、彼はその問題と取組む決意をしていたのである。彼は又、慎重に、または、おずおずと市民権の問題に取り組もうとしていたのではない。ニュー・オルリアンズでは、既に彼の手が感じられていた。

電話で彼はルイジアナ州の司法長官ジャック・Ｐ・Ｆ・グレミリオンに対し、同州の裁判所が連邦政府の方針に服

従し、ニュー・オルリアンズの学校が無差別入学の実施をつづけるのを監視するために、司法省はあらゆる武器を使用するであろうと述べた。同時に、彼はグレミリオンの意見も聞きたいと言った。かくして、グレミリオンはワシントンに飛んだのである。ルイジアナの議会が、ニュー・オルリアンズの学校の俸給支払に必要な金額を、あらかじめ議決することをしなかった時に、ボビーはすこしも驚かなかった。彼は、ジミー・デイヴィス知事と州議会に対して、法律上の闘争をするばかりでなく、同州に対して政治的な報復措置をとるであろうということをほのめかした。すると、突然デイヴィスは教師のためにとっておくための特別基金を設けたのであった。だが、これらは、長いたたかいのほんの前哨戦であるに過ぎなかった。解決すべき問題は沢山残っていた。それらは、ボビー・ケネディに行政的な手腕と勇気が必要とされるばかりでなく、忍耐と知性もまた必要とされる長期間の骨の折れるたたかいが待っている事を告げたのである。

連邦政府内の法律上の義務以上に、さらにもっと重要な役目があった。それは、彼が歴史上もっとも危機的な状況に直面している大統領の腹心の友であるということであった。ボビー・ケネディよりも大統領に親しい人は殆んどいなかったであろうから。

その模範とも言うべき型が既に出来上りつつあった。ケネディ計画を推進するために議会に於てもっと多くの機会がめぐって来る様に、民主党員たちが議会規則委員会を従来よりも自由化しようとした時、ボビーは其の運動に介入し議会に対する攻撃をはじめたのであった。ホワイト・ハウスの組織がおちついて来るにつれて、ボビーがこういう仕事を個人的にすることは殆んどなくなってきた。だが、いつでも彼の忠告が求められたのである。連邦政府の直面する全範囲の諸問題について、殆んど毎日、彼ら兄弟は電話で話し合っていたのである。ボビーがホワイト・ハウス

をひそかに訪問して其の兄と食事を共にする時、国家目的、および国家の方向についての広汎な意見が徹底的に交換されたのであった。二人は共に一九六四年の選挙について、用心ぶかく眼くばせをしていた。そしてこれらの問題については、ボビーの意見以上に重く見られる意見はなかったのである。

ロバート・ケネディの人生を貫く一つの主題があるとすれば、それは彼がいつも誰かほかの人のために働いて来たように思われるということ、すなわち彼が陰の存在であったということである。確かに彼は彼自身の権利において認められて来ていた。だが、他人、特にジャックが、彼の疲れを知らないエネルギーから多くのものを得て来ていた。

ボビー・ケネディは、一番下の息子エドワード（テディ）を除いたすべてのケネディ家の子供たちと同じように、マサチューセッツ州ブルックラインの質素な二階建の家の寝室において生まれた。それは、一九二五年十一月二〇日のことであった。それは、金の面から言っても、子供の面から言っても、ジョー・ケネディの人生において、どちらかというと消耗性の多い、それでいて豊かな時代であった。ボビーは、九人の子供のうちの七番目であった。

ボビーが実際に物事の多くを記憶出来るようになる前に、家族はニューヨーク州・リヴァデイルに引越した。その頃、ジョーは巨額の富をつくるべく奔走していた。そして、子供たちのうちで一番年上のジョー・ジュニアは、化学実験の設備で家に火事をおこした。後年、かれは自分にとっての最も初期の記憶は、巨額の富のことでなくて、火事のことであるといっている。

彼の学校経歴は非常に移りかわりの多いものだったので、ボビー自身、自分が在籍したすべての学校を年代順に想い起すのに困難を感じる位であった。「私は少なくとも、約十二の学校に通った」と、彼はその学校名を全部揃えよ

うと骨を折って、誇張していうことがあったという。彼が学校生活をはじめて経験したのは、リヴァデイルの共立学校においてであった。だが、間もなく、彼は、そこをやめて、二つの私立学校を転々とした。それから家族はブロンクスヴィルに引越し、そこで彼はブロンクスヴィル公立学校の第三学年に入った。二、三年後に、彼はロンドンのギッブス・スクールに入っていた。それから、ハーヴァードに入学する前に彼はセント・ポール（コンコード、ニューハンプシャ）、ポーツマス（ニューハンプシャ）、プライオリティおよびミルトン（マサチューセッツ）などのアカデミーを順番に学んで行った。

幼い頃からのボビーの最大の才能は勉強することではなかった。当時においてさえ、彼の激しい闘争性は明らかであったのである。彼は、フットボール、野球、水泳、テニスおよび帆走を好んだ（「戸外のものなら、ほとんど何でもだ」と彼は言っていた）。彼のすべてのエネルギーが、このような健全な娯楽についやされた訳ではない。ブロンクスヴィル郊外の色々な道具をしまっておく物置小屋で、彼は古いラヂエーターをひっくりかえした。それは彼の足をうち、二番目の足指をきずつけた。つぶされた足指の痛みよりも、彼がこういうことをしたことについて、家族が何というであろうかという懸念の方が、彼にとっては面倒であった。約半時間、彼は苦痛を我慢した。そして、靴をぬごうとはしなかった。彼が靴を脱いだ時、血がべっとりしみついていた。ボビーは急いで医者のところにかつぎこまれたのである。

いたずら好きの姉のユーニスが、かつて菓子に上塗りしてあるチョコレートをロール巻きにして、食事のテーブルでボビーに投げつけたことがある。ボビーは元気一杯、このいたずらに対抗した。そして、ブロンクスヴィルの家の中をユーニスを追いかけまわし、ついに彼女を追いつめたと思うところまで来た。彼女はテーブルの前に立ってい

た。ボビーは頭を下げて、牡牛のように突進した。ユーニスは軽く身体を横にどけた。するとボビーはテーブルにぶつかり、大きく口をあけた傷口から、血が顔に流れおちた。そして、またも彼は大急ぎで医者のところへ連れて行かれた。

これらの少年期にボビーは或る程度、自然の生物の愛好者になっていた。彼はいつも家のまわりに動物を飼っていたようである。そして、多忙な政治生活に入ったあとでも、なお彼はそういうことをしていた。週十セントの小使銭を補充するために、ボビーは白うさぎを繁殖させて、売ろうと決心したこともあった。（「本当にただ真白の白うさぎです。それは沢山の子供を生む種類です」）。彼は諸道具などをしまっておく物置小屋に、兎を飼う場所をこしらえ、忠実に兎たちの番をした。兎たちは、宣伝したとおり、本当に増殖した。そして、やがて、ボビーは、その近辺の人たちを相手に、白兎を上手に商売するようになったのである。彼の母親ローズ・ケネディは、忍耐心が強く、人を元気づけてくれる人であったが、マサチューセッツ州ハイアアニスポート（彼らが夏をすごした家のあるところ）に、彼のための銀行預金をつくってくれた。この貯蓄金額はその後も使用可能の状態におかれ、彼が司法長官になった後もなお、其の額は大きく、総額、四二ドルが保管されていた。

それから、すこし後、ジョー・ジュニアは、ボビーに彼が賞品に貰った豚をプレゼントした。その弟はこの豚にすぐにポーキーという名をつけた。そしてすぐに兎たちと並べて、物置小屋の中に、豚を飼育するための設備を設けたのである。ポーキーはお気に入りの愛玩物となった。ブロンクスヴィル時代の近所の人たちは、彼が自転車のペダルを得意そうにふんで、大急ぎで側を走っているポーキーをひっぱって、家族ドライブを楽しんでいる親しみある姿を思い起すことが出来ると語っている。

ボビーは彼の父親がウォール街で成功をおさめている時に、商売に手を出してみた。彼はサタディ・イーヴニング・ポストおよびレディズ・ホーム・ジャーナルのセールスマンになった。彼はこの事業の詳細について、中々すべてを語ろうとしなかった。しかし、それを覚えている人たちは、そのドラマは三部から成っていたと言っている。妻のエセルは次のように回想している。「この仕事をはじめた当初ボビーはポーキーをひきつれて、自転車から雑誌を配達していた。次に近所の人たちの眼にうつったことは、家族用の自動車であるロルス・ロイスの後部座席にボビーが乗り、雑誌も同じく後部座席にのせ、運転手のデイヴが車を運転してまわり、ボビーが売り込むというやりかたであった。バイクもなければポーキーの姿ももはや見えなかった。そして、最後には、デイヴがまったく彼だけで雑誌をはこんでまわった。そして、ひとは容易なことではボビーの部屋に入って行けなくなってしまった。非常に数多くの売れない雑誌がまわりに山のように積まれていたのである」。

十歳の時にボビーは家族と共に英国にわたった。彼の父親がフランクリン・ルーズベルト大統領によってセント・ジェイムズ宮廷への大使に任命されたからである。アメリカ本国において彼の興味をひいていた諸活動を英国においても出来るだけの努力をして続けて行った。英国のボーイ・スカウトが彼に対して、英国王に対して忠誠を誓う必要がない旨を認めて、入団にあたっての必要な誓いの変更を許可した後、彼は英国のボーイ・スカウトに参加したのであった。彼はギッブスの学校でクリケットもやったし、サッカーもやった。そして王女マーガレット・ローズやエリザベスと共に子供たちのパーティーに出席し、少年少女たちの社交円舞に参加したのであった。(筆者の知る限りそれ以来、其の死に至るまでボビーはマーガレット・ローズにもエリザベスにも会ってない)。

彼は非常に若かったけれども、彼は既に大人の世界へ順番に組み入れられて行った。それは厳格な父親の家族全体

に対する習慣的なやりかたであった。その頃大戦の暗雲は、丁度英国海峡を横切って其の姿をぼんやりと現わしはじめていた。ケネディ家の人々は大陸を旅行した。ボビーは紛争の瀬戸際に立っているヨーロッパ諸国民のすべてを見た。ドイツにおいてナチスが閲兵分列を行ない、ハイル・ヒトラー叫んでいた恐ろしい光景をみた。

学校の構内では英国の学校仲間たちと絶えず喧嘩が行なわれていた。組打はいつも、アメリカ合衆国と英国のどちらがすぐれているか、そして第一次世界大戦において本当に勝利を占めたのは、此の二国のうちのどちらであるかについての論争に関してはじまるようであった。彼は喧嘩に勝った。だが負けた時もあった。

スポーツと戸外生活を楽しもうとする彼の気持はなおも続いた。兄のジャックがそうであったのとはちがって、彼は読書家ではなかった。彼は学校で相当いい成績をおさめた。だが、それ以上の成績をおさめることは滅多になかった。戦争がはじまった時ジョー・ケネディは、家族たちを米国に送り返した。そしてボビーは、また学校へ出かけて行った。ミルトンで彼の力はようやく認められはじめた。彼はただクオーターバックとしてフットボールチームで活躍したばかりでなく、色々な書物を探し出して勉強した。最初はゆっくりであったが、次第に増大する熱意で、彼は歴史と伝記の勉強をした。それはほとんどジャックのやりかたと同じであったが、この兄のようにたやすく、そして素早く行かなかったことは確かである。事実すべての事柄において、ボビーは彼の二人の兄よりも、難しい状況に直面したようである。「彼にとっては、ほかの兄弟たちにとってよりも、学校生活はるかに骨が折れた――社交的にもフットボールにおいても、また勉強においてもそうであった。」「だが、彼ははげしい努力によってそれをやりとげたのであった」と、彼の友人の一人は語っている。

多くの点で彼は他の学生たちとちがっていた。級友のダヴィット・ハケットが回想するところに依ると、「彼は酒

も飲まなかったし、煙草もすわなかった」。「時間に余裕がある時には彼はほかのことをした」（彼は煙草もすわず酒も飲まなかったので、廿一歳の時には父親からの小使銭を二〇〇〇ドルもためていた。ジャックの方は、学校時代にビールをちびちびと飲んだ。そして小遣銭をすべてつかいはたしてしまった）。ボビー・ケネディはほとんど何でもやってみた。ハケットの言うところによると、彼はうたうことが出来なかったけれども、グリー・クラブでうたった。彼はまた、テニスもやった。一九四三年に彼がミルトンを去った時、「彼は雑談は決して上手でなかったし、社交的な楽しみを味うことも決して上手ではなかった。また、彼は立派な愛人でもなかったけれども、彼は、どの学生にもまけぬ位、人気があった」。

すべてのケネディ一族のものたちと同じように、ハイアニスポートに家族の者たちが集まってすごした日々は、ボビーの人生において、実際、他の何ものよりも大きな意味を持っていた。やさしいが、それでいてしっかりした指導が、絶えずローズ・ケネディによって行なわれていた。幼かった頃から彼女は子供たちに読んできかせた。毎週金曜日には教義問答を必ず学ばせるようにした。そして子供たちがたえず自分自身を進歩させるために努力するよう言ってきかせていた。彼女は子供たちが幼かった時でさえも、子供たちが机に向っている時に雑談をするのを許そうとはしなかった。彼女は子供たちを国家的聖地につれて行くことに依って、子供たちに彼らの歴史的伝統にはっきりとめざめさせようと、特別の注意をはらった。ハイアニスポートの家には、父親ジョーの手が感ぜられた。ボビーの人生の多くを通じて、ジョーは株式市場の仕事に急がしかったし、あるいはまた遠くハリウッドにいて映画産業でさらに多額の富をつくるために働いていた。だが、彼の存在は感じられていたのであった。ジョーは子供たちに烈しい競争精神を持たせるよう、彼らを激励した。ボビーは、彼とジャックがナンタキット・サウンドでヨット競争をした時の

ことを思い出す。その時、父親のジョー・ケネディは自分のモーターボートに乗って水繁吹をあげながら彼らの側を走っていた。そして子供たちのするどんな動きでも見つめて注意を与えようとしていたのであった。彼は子供たちが勝負にまけると憂鬱であった。ジョーはよく庭に出て子供たちと野球ボールの投げ合いをした。あるいはまた、彼らがタッチ・フットボールをするのを注意深く眺めていたのであった。

ジョーが長く留守をする時には、ジョーの精神はジョー・ジュニアによって実行された。年齢から言っても親しさから言っても、ボビーは彼の弟であるテディにより近かったけれども、ジョー・ジュニアは偉大な力を持っていた。彼は弟たちの挙動を注意していた。彼はボビーに泳ぎを教え、ヨットの操縦法を教え、父親が彼に教えこんだのと同じく、勝つための迫力をこめたフットボールのやりやたを教えた。

ボビーがミルトンを出た時に戦争はもう進行中であった。彼は海軍の飛行士をしていたジョー・ジュニアからすすめられてV五海軍航空作戦に参画した。彼はメイン州・ベイツ・カレッヂに船で運ばれ、そこで八ヶ月間をすごした。戦争の潮が方向を変えて来るにつれて、彼はV五計画からV十二計画へと移転させられた。彼はハーバードに送られ、そこで海軍予備将校訓練団に入った。それから彼は、それ以上そういう生活をすることは出来なくなった。彼は家族の昔からの友人である海軍長官ジェームズ・フォレスタルと会ってみた。そして彼から海上任務につけるような指令を受けたのである。彼はあらたに就役した駆逐艦ジョゼフ・P・ケネディ・ジュニアーの乗組員になった。この駆逐艦は自ら志願して勇敢な爆撃行に出かけて行って戦死した彼の兄の名前をつけられていたのである。

だが、ここでも彼の海上勤務は、彼が求めていたものとはおよそかけ離れていたのである。二等水兵ロバート・ケネディは四ヶ月間、ペンキ塗料をかきおとす仕事をしていた。それから、二ヶ月間はレーダー・シャックの中を動き

まわるブリップの監視をしていた。彼は敵の姿を全然見なかった。それは彼の二人の兄弟の記録とは殆んどくらべものにならない記録であった。その一人は英雄として戦死した。そして他の一人は彼の指揮をしていたPTボートが日本の駆逐艦によって二つに裂かれた後、乗組員たちを救出するために十五時間にわたって海上で奮闘したことに対して、海軍および海兵隊勲章を貰ったのであった。

一九四六年に海軍を去ったボビーは、はじめて政治に興味を持つようになった。ジャックはボストン十一地区から、国会議員に立候補していた。彼はボビーを説得して選挙事務をやらせた。かくて、この年下の方のケネディの仕事は非常に貧乏な地区である東部ケンブリッヂにおいて票を獲得することであった。指示もなければ、計画もなければ、肩書もなかった。「私はドアーのベルを鳴らしながら戸口から戸口へと訪問してまわった」と彼は言っている。「私はそれらの家の人たちに言ったことを覚えていない。私は私の兄に投票してくれるように頼んだだけだと思う」。訪問を受けた人たちのうち、充分な数の人たちが彼の勧めに従ってくれた。そしてジャックは民主党の予選会に勝ったのであるが、このことは選挙に勝つのと同じことを意味したのである。

ジャックのチョート時代の同室者の一人K・ルモイン・ビリングスと一緒に二ヶ月間にわたってラテン・アメリカをあちこち自由に旅行して歩いた後、帰宅したボビーは、今度はハーバードの教育を受けようとしていた。だが、彼の最初の愛人はフットボールであった。「彼は大学チームの一員になれるだけの権利は持っていなかった」とチーム仲間ともなり、また親友ともなったケン・オドンネルは述べている。「それはちょうど戦争の直後で、すべての人が兵役から帰って来ていた時期であった。前衛線の両端には我々よりも大きく、はやく、そして高等学校時代華々しく活躍した経験のある選手たちが八人も控えていたのである」。

だが、ボビーは彼らの大部分をうちまかした。そして其のチームに地位を得たのであった。「彼は速くもなかったし巧妙でもなかった。」とオドンネルは続けている。「彼は別の性質を持っていた」。その性質とは、断固とした性質であった。それは五フィート十センチ、百六十五ポンドの彼の全身に満ちていた。最初のうちボビーはパスをうまく受けとめることが出来なかった。彼は練習出来るよう、オドンネルに彼のためのボールを投げてくれるよう頼んだ。彼はチームの他の者より一時間は早くやって来た。そして他の誰よりも一時間遅く残ったのである。「彼は敏速で疲れを知らず、ほかの者の五倍は烈しく動いた」とオドンネルは言っている。「彼は前衛線の端から狂暴なインディアンの様に割り込んで来た。もしもあなたがボビーをブロックしようものなら、或いはまた彼をノックダウンしても、彼はそのプレイのあとで立ちあがってまたついて来るだろう。彼は決して諦めるということをしなかった」。

或る練習試合の時にボビーはプレーをうまく運べず、仲間の行動を妨害する形になってしまった。彼の前進をさまたげるタックルが行なわれていて、彼の身体がラインからはずれたのであった。何回も何回もチームはそのプレーを繰りかえしたが、そのうち、コーチのディック・ハーローはボビーに対してだんだんと苛立って来た。突然、ほとんど怒りで涙を浮べて、ボビーは崩れるように倒れた。彼らは競技場からボビーをつれ出した。そして彼が足の骨を折っていることに気がついたのであった。

ハーバードにおける彼の学問上の成績は、普通であった。後年、彼は「本当のことを言うと、私はそう多く教室に出席しなかった」と、自ら認めているのである。「私は多く語り、多く議論するのを常としていた。そして其の話題は大部分がスポーツと政治についてであった」。だが、運動場において現われたケネディ家伝統の闘争心は、ほかの事柄においてもまた姿を現わしたのであった。一人の友人とカソリックのセミナーに参加していた時、彼は一人の牧

師が、すべての非カソリック教徒は地獄に行くだろうと宣言するのをきいた。これを聞いたボビーはひどく怒った。そして彼は客であったけれどもその牧師に対して公然と反対した。ボビーの友人は非常に驚いて、次の日牧師のところへ行ってあやまった方がいいと彼に勧めた。彼は拒絶した。そして、いかなるカソリック教徒も斯様なことを教える権利を持っていないと断固として主張した。(この牧師は後に、この説教をしたために破門された)。

ケネディの社交生活はミルトンにいた頃にくらべてそう多く進歩していた訳ではない。彼は世捨人ではなかった。だが、彼は色々なパーティーの気狂いじみた乱舞を一顧もしなかったし、彼の程度の富を有する学生が求めることが出来たデートの機会を求めもしなかった。彼はヘイスティ・プディング、シュペー・クラブおよびヴァーシティ・クラブの会員であった。そして、それらのクラブで時間の大部分をすごした。一度彼はフットボール・チームの全員を連れて、排他的なシュペー・クラブに出かけて行った。これにはクラブの会員たちは非常に驚いた。それで彼は除名されるかも知れないというあぶない立場に追いこまれた。それで彼はこのクラブの行くべき方向を示唆した。彼は追放されないで済んだのである。

もう一つ別の機会に彼はボストンの一ガールフレンドを電話で呼び出した。そして、彼女のところでこれから行なわれようとしているパーティーに、数人のチーム仲間を一緒に連れて行っていいかどうか尋ねた。彼女は同意した。だが、このことはこのパーティーに関係しているすべての人々に緊張感を与えたことがわかった。「我々は二度と決して行かなかった」と彼は言っている。「それは我々にとって共に楽しむ場ではなかった」。

社交的会合に対する彼の態度は、その後も変ることはなかった。「年中こういう会合に出かけて行く人は、実質的な貢献は出来ない」と彼は言っている。

一九四四年から彼のカレッヂ生活の時代を通じて、彼はエセル・スケイケルという名の生々とした心のやさしい少女に対して次第に強い関心を持つようになってきていた。彼女は彼の妹のジーンの友人であって、彼がカナダへのスキー旅行をした時に会ったのである。コネチカット州グリーニッチの七人家族の六番目の子供である彼女は、ボビーと性格が大いに似ていた。彼女は戸外の生活やスポーツを楽しんだ。彼らは愛し合っていたが、それでも其の結婚は、ボビーが擾乱の中東をボストン・ポストの通信員として旅し、次いでベルリン空輸を視察するためにさらに足をのばして北方への旅行をしたあとまで、延ばされていたのである。彼らが結婚したのは一九五〇年のことであった。

合衆国に帰って来た彼は、何か一つのことをやるにしても、彼には準備も装備も出来ていないことを突然感じた。彼はヴァージニア大学法学部に籍を入れた。そして今度は自分の勉強にとりかかったのである。彼の成績はよかった。だが彼の校庭での活躍はさらにもっとよかったのである。彼は活動を停止していた学生の法律討論会の復活をたすけ、その議長になった。彼はこの討論会の議長として最高裁判所判事ビル・ダグラス、ニューヨーク・タイムズの学者アーサー・クロックや、当時ちょうど人々の注意をひきはじめていたジョー・マカーシー上院議員などを討論の場に連れて来た。ラルフ・バンチを校内に連れて来て講義をして貰うことの許可を得るために、彼は断固として闘争しなければならなかった。だが彼はこの闘争に勝ち、それに依ってはじめて本当の国家的名声のしぶきを受けたのであった。一九五一年に此の法学部を卒業したボビーは、その政治生活に乗り出す準備を終っていたのである。彼の公的生活は司法省においてはじめられた。

法務官としての生活の当初から、ボビーはいくつかの良い機会にめぐまれた。彼が判事としての仕事についた時、彼は国内保安局の所属となった。そして彼が担当した最初の事件の一つはオウエン・ラチモアーの忠誠心の調査に関

するものであった。此の事件の次に、彼はトルーマン政権の腐敗問題にとびこんで行った。彼はこの仕事を担当させられた三人の法務官のうちの一人であった。そして、彼の最大の仕事はブルックラインにおいて行なわれたのであって、この時彼は国内税務局長ジョー・ナナン事件の主要部分を大陪審に起訴したのである。

一九五二年にジャック・ケネディは、ヘンリー・カボット・ロッヂの上院の議席に挑戦した。ボビーは此の選挙戦を指揮するためにワシントンにおける自分の仕事に別れを告げた。其の時彼は二十六歳であった。